

戦争終結時の決死の行動

1944 年に戦局が変わったとき、日本軍はいよいよ、特攻攻撃か神風特攻に出ようとしていました。神風特攻隊の飛行機は、特攻兵器として最も有名でしたが、特攻攻撃船も太平洋艦隊を攻撃するのに使用され、フィリピンの戦いのときにきわめて有効であると証明されました。マルレ艇と呼ばれるこれらの軽量ベニヤ板製の高速艇は、全長 5.6m、全幅 1.8m、重量は 1,200kg あり、途中で 2 個の水中爆雷を標的に向かって降ろし、水の上を素早く移動するには十分軽量でした。慶良間諸島では、この船は赤松大佐の指揮のもと、海上挺進第三戦隊として操縦されました。渡嘉志久ビーチのちょうど裏手にある、12m の深さの防空壕は爆撃から特攻攻撃船を守るために作られました。これは、韓国人の徴収労働者が、おそらく地元の女子青年会の会員の手伝いもあり、硬くて黒い千枚岩を掘って作られたものです。

第二次世界大戦終結時の歴史的な米軍の映像には、防空壕の特攻攻撃戦と、この船に乗る米兵が映っています（映像の長さ 3 分）。